

この素晴らしいロリコン共に災いを！

月兎。

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

佐藤和真の妹はロリコンホイホイだった――

引きこもりの兄、佐藤和真が死ぬ数時間前……妹である小学生の佐藤風沙は、変質者から逃げている途中、車に跳ねられ死んでいた。

その後美しい女神から魔王討伐の為、チート能力を授かり憧れの異世界へ。

しかし昔からのロリコンホイホイ体質のせいで、碌なパーティーに恵まれず…!?

「この町にマトモなイケメンはいないのか…」

来たれ常識人！ロリコン共に災いあれ！奇天烈な冒険ギャグファンタジーこれより開演!!

目次

第1 嘸	この哀れな妹に転生を！	1
第2 嘸	この異世界初心者な妹に道案内を！	5
第3 嘸	この複雑な死因の兄妹に再会を！	10
第4 嘸	この駆け出しの妹にクエストを！	14
第5 嘸	この杖の無いエレメンタルマスターに素材を！	18
第6 嘸	この幼馴染みに回復魔法を！	21
第7 嘸	この二人組パーティーに聖職者を！ (前編)	26

第1 囁 この哀れな妹に転生を！

妹 side

目が覚めると、私は真っ白な空間にいた。

目の前には水色の髪綺麗なお姉さんがいて、悲しげな表情で目を潤ませながら此方を見ている。

「ようこそ死後の世界へ。私は貴女に新たな道を案内する女神アキラ。佐藤風沙さん、辛いでしようが…貴女の人生は終わったのです」「え…」

あまりのことにランドセルが肩からズリ落ちそうになり、背負い直してから再び女神と言ったアキラ様の方を向き問いかける。

「えつと…私死んだんですか？」

「ええ、そうよ…」

そう言った瞬間、アキラ様はハラハラと涙を溢しながら私の目線までしゃがみ両手を掴む。

「そう！学校の下校中にたい焼き屋の良い匂いに誘われて、たい焼きを購入し買い食い!!」

頬袋を膨らませ幸せそうに顔を綻ばせている幼い少女を見て、通りすがりの変態は貴女にターゲットロックオン!!

ハアハア鼻息を荒くしながらしぶとく追いかけて来る変態から必死に逃げた末、曲がり角から突然現れた車に跳ねられ死んだのよおとおおおッ!!」

「うわああアキラ様落ち着いてええッ!!」

あまりの悲惨さにアキラ様は私を抱き締め号泣し始めた。そうか、私はあの時跳ねられたのか。

本当は私が悲しむところなのに、アキラ様が泣き叫んで私に頬擦りするものだから、あんまり落ち込んでいない自分がある…というかアキラ様胸！胸当たってるから!!

「そんなのあんまりよッ!!こんな可愛い子供を厭らしい目で追いかけて回して！挙げ句にそのせいで跳ねられて死ぬなんて!!」

しかも轢かれると分かっているのに、それでも触りたくてあの変態

は貴女の後を追って車に飛び込んで同時に死んだのよッ!!

なんなのあの変態!!ここまでくるといつそ清々しいわッ!!でも安心して、あの変態は貴女と同じ世界には行かせないから。」

「同じ…世界?」

私の呟きを聞いて漸く冷静さを取り戻し、ポンと掌を拳で叩いてから「そういえばまだ言っただけじゃなかったわね」と言いながら、一旦私から離れる。

「佐藤風沙ちゃん。貴女にはこれからどうするか、いくつかの選択肢があります」

「選択肢?」

「1つ、娯楽が一切無い天国と言う名の永久地獄で、肉体と言う概念を失くしてお爺ちゃん達とずっと日向ぼっこして過ごす。

2つ、記憶を全て失くして元の世界で赤ちゃんから生まれ変わる。つまり輪廻転生ね。

そして3つ、ゲームの様などある異世界を脅かす魔王を討伐するため、その異世界に今の貴女の状態を引き継いだまま転生する。」

なんだか色々ツツコミ所が多いけど、取り合えず…ゲームの世界ならば是非ともそちらへ転生したい!!

今まで兄の影響でかなりのゲーマーとなった私にとって、最早そこは天国!夢にまで見た異世界!!

「是非とも異世界に行きたい所ですが、私はごく普通の小学生ですしまだ子供です。そんな私が異世界に行ったら即死なんじゃ…」

「異世界行きね!心配ないわ、行ってすぐ死んじゃうんじゃあ意味が無いから、何か一つだけ。

向こうの世界に好きな物を持っていける権利をあげる。

それは、強力な固有スキルだったり。とんでもない才能だったり。これまで転生してきた人の中で、神器級の装備を希望した人もいたわ。」

そう言っただけ、アクア様は辞書並みに分厚い大きな本を私に差し出す。

この中から選べることか。

うーん、ファンタジーゲームならばやはり魔法が使えるのは必須事項！ゲームで必ず魔法使いを選ぶこの私が、もし異世界に行つて魔法が使えなかったら？

そんなの絶対に嫌だ！強い魔法とか使つてみたい！だからもし選ぶならば……ん？「魔法使いセット」？何これ。

＊魔法使いセット

魔力と魔力容量を大幅UP！

どんな職業に就いても、

全ての魔法関連のスキルを習得出来ます！

人間以外の種族でも、

魔法であれば習得可能！（一部例外は除く）

おまけとして空飛ぶ箒もお付けします！

目指せ最強の魔法使い！

うおおおなんだこのチート能力！！

魔法ならなんでも覚え放題な上に飛行用箒までついてくるなんて！

「アクア様！これでお願いします！」

「分かったわ、じゃあその魔方阵から動かないでね！」

それとランドセルの中に少しだけお金入れといたから、資金として使つてちょうだい。流石に無一文じゃ子供にはキツイわよね。」

「ありがとうございます！」

「それとこれは、私からの饞別よ」

そう言つてアクア様は私の前髪をあげ、額にキスを落とす。私のおでこが淡く光った気がした。

「え、今のは……」

「貴女はまだ子供だし心配だから、特別に女神の加護を授けるわ。ちよつとしたお守りだと思つてちょうだい。」

さあ勇者よ！願わくば数多の勇者候補達の中から、貴女が魔王を打ち倒すことを祈っています！

然すれば神々からの贈り物として、どんな願いでも叶えて差し上げ
ましよう！」

美しい女神様にデコチューされて頬を赤らめる間も無く、私の体は
ふわりと浮き白い光に包まれた。

T o b e c o n t i n u e d . . .

第2章 この異世界初心者な妹に道案内を！

妹 side

うわあ…本当に異世界に来ちゃったよ。

どうも皆さんこんにちは、先ほど女神様に転生してもらってウハウハな風沙です。目の前に広がるのは、これはテンプレートですからと言わんばかりの中世風の街並み。

行き交う人々は人間以外にも獣人やエルフなんかもいちやったりして、更にテンション上がっちゃいます！

「えーっと、まずはゲームのお約束であるギルドに行きたいんだけど、何処にあるんだろう…」

「あれ、凧ちゃん？」

「ん？」

声のする方へ振り返ってみると、そこには兄と私の幼馴染みがあった。た。

え、なんでこんな所に？そう思っていると、幼馴染みは顔を輝かせこちらへ突進してきた。

「うおおお会いたかったぜ俺のマイエンジェルウウウツ!!」

「せえいッ!!」

「ゲフウツ!!」

抱き締めようとしてきた幼馴染みに必殺のゴールデンキックをお見舞いすると、幼馴染みは地面に踞って悶える。

返事がない、ただのしかば…ゲフンゲフン。不本意だけどこの変態な幼馴染みを紹介します。

橘雅也 16歳。

佐藤家の隣人で兄の幼馴染みにして親友。

私にとっては幼馴染みというより、お隣さん家のお兄ちゃんって感じかな？親友と言っても兄からの対応は雑で、他の人と変わらず毒舌を吐いても私達についてくる打たれ強い奴だ。

動物に例えると間違いなく犬。

その打たれ強さは感心するが、コイツは真性のロリコンだ。私がス

カートを履いた時は、「パンツ見せてもらっても良いツスカ!」と言って、兄に殴られるのがお約束となっている。何処の骸骨だお前は。

「なんでこの世界にいるの!?最近見かけないとは思ってたけど!」

「三日前お前らとコンビニで会ったじゃん?一緒に帰る時にコーラ開けたの覚えてる?」

「うん、何処のガキが振ったか知らないけど、ペットボトルから大量の泡とコーラが零れ落ちてたね。」

「あのとき、隣に駐車してたバイクにかかっちゃってさ。拭くもの無いし三人で逃げたよな。」

次の日学校に行こうとしたら、玄関の外に黒服のオッサンが二人いて、「うちの坊っちゃんバイクどうしてくれるんじやワレエ!」とか怒鳴られながら黒塗りの車に乗せられて……

その後ドラム缶に入れられてコンクリートで固められて東京湾に……」

沈められたのか。

「東京湾に沈めたるかボケエ!!」とか良くドラマや映画で聞くけど、マジでやる人いるのか……。まさかそんな死に方をしたなんて……あまりの不幸っぷりに同情するわ。」

「ど、どんまい。その変わりこうして異世界に来られたんだから良いじゃん!前向きに考えようよ、ね!」

それで話は変わるんだけど、ギルドって何処に行けば良いの?」

「ああ、お前来たばかりか。ギルドなら俺も用事あったし案内するよ、ついて来て!」

そう言っ私の手を取り、雅也は足を進めた。

……恋人繋ぎしてきたので鳩尾を喰らわせてやった。

—冒険者ギルド—

どうやらギルドは酒場と一緒になっているようで、周りには沢山の冒険者がガヤガヤと賑わっていた。

私は雅也と共に、真っ直ぐ受付のあるカウンターへと向かう。受付

は四人、その内三人は手が空いている状態。

四人の受付の内、二人は男性職員だった。

……私達は無言で美人な方の受付嬢の所に行く。やっぱり綺麗なお姉さんが良いよね、うん。並んででもお姉さんの所に行きたい！

「次の方どうぞー！今日はどうぞされましたか？」

「えっと、冒険者になりたいんですけど…」

「あら、まだ小さいのにせっかちさんね。」

では登録手数料が1000エリス掛かりますが大丈夫ですか？」

「え、そうなんですか？」

せっかちさん……なんかその言い方にキュンとした。

私は隣にいる雅也にこの世界のお金について教えてもらい、アクア様から貰っていたお金から1000エリスを支払った。

支払う際にカウンターが私にはまだ少し高くて背伸びしてたら、お姉さんから子供を見守る母親の様な目で見られた。

なんか恥ずかしい…。

「それでは此方のカードに触れて下さい。」

これで貴女の潜在能力が分かりますので、潜在能力に応じてなりたいクラスを選んで下さいね。

選んだクラスによって、経験を積む事により様々なクラス専用スキルを習得できるようになりますので、その辺りも踏まえてクラスを選んで下さい」

ああ、さつき選んだ魔法使いセットの影響でステータスが凄まじい事になって周りが騒いだりするのかな。

ちよつと良い気もするけど、あんまり目立ちたくないなあ……ただでさえ私子供だし此処では浮いてるのに。

私は内心不安になりながらカードに触れた。

「えーっと、サトウナギサちゃんですね。ふむふむ……身体能力はそこそこと言った感じでしうか、平均的ですね。」

知力は平均以上で幸運は高い……って、はああああッ!?なんですかこの魔力は!!

魔力と魔力容量が尋常じゃないんですが、貴女何者なんですか…ッ

!？」

ワオ、やつぱり驚かれたよ。

しかも周りの人達も注目してるし……このファンタジー世界にロリコンはいないと信じたい。

「あれ、スキルが既に備わってる……「女神の加護」!? 噂で耳にしたことはありますが、まさか実際にそんなスキルを持った人がいるなんて!!」

あのおでこにチツスされた時のか、まさかスキルになるなんて思わなかった。

デコチューだけでスキル習得って凄いな。

「このスキルは女神様に祝福された者の証! 女神様に愛された者しか持たないと言われている幻のスキルですよ!!」

敵からの即死魔法と魅了チャーム無効、受けた攻撃魔法のダメージ半減! 余程強いモンスターに会わなければまず死ぬことは無いですね!」

え、そんなに凄いものだったの!?

私が選んだ魔法使いセットより凄くない!?

アクア様ありがとう! とんでもないお守りをくれて!! 完全にチートだけどね!

これで安全に冒険出来る……って、お姉さんの大声で施設内がざわめいてるけど!

「これならどんな魔法職にでもなれますよ!

アークプリーストにエレメンタルマスター、アークウイザードにビーストサマナー等!」

「ん? エレメンタルマスターって……」

「エレメンタルマスターとは、精霊の力を借りて魔法を使う魔法職です。」

通常の魔法も使えますが、精霊に協力してもらうことにより魔法の威力も上り、強力な魔法を放つても疲労感は他の魔法職の方より少なくて済みます。

優秀でとても魅力的な職業なのですが、精霊に気に入られないと能

力を上手く惹き出せませんし、人柄が良くないところの職業は難しいと言われているので、あまりなる人が少なくレアな職業となつています。

子供の貴女でしたら精霊も心を開きやすいと思うので、天職だと思いますよ！」

確かに妖精さんとかそういう類いの生き物は、子供に気を許してるイメージがある。ファンタジー好きにとって、これほど心踊らせる職業はそう無いだろう。

「じゃあエレメンタルマスターでお願いします！」

「畏まりました、エレメンタルマスターとして登録させて頂きます！」

改めて、冒険者ギルドへようこそサトウナギサちゃん。スタッフ一同、今後の活躍を期待していますね！」

そうお姉さんが言い終わると同時に、施設内にいた人達から拍手喝采が起きた。私は顔を真っ赤にしながら、皆にペコリとお辞儀した。これから宜しくお願いします！

さて、キャラメイキングも済んだ事だし…宿探しの前に装備を買い揃えますか！

私は拍手喝采の嵐に呆気にとられている雅也の手を掴み、ギルドを後にした。

T o b e c o n t i n u e d …

第3章 この複雑な死因の兄妹に再会を！

兄 side

この間俺がギルドで冒険者登録をした時、受付のお姉さんから妹さんはいるかと聞かれた。

確かにいるが何故そんなことを聞くのかと尋ねると、先ほど俺と同じファミリーネームの女の子が登録しに来たそうだ。

日本では佐藤なんて苗字はありきたりだったが、果たしてこの世界に俺と同じ苗字の奴なんているだろうか。

いやサトウなんて苗字絶対無いだろ、こんなファンタジー世界に。そこで駄女神に問い質した所、どうやら俺が死ぬ数時間前に妹も死んだらしい。

……それを早く言えよツ!! お前それでも女神か! そういう事は俺が死んだ時に真っ先に言えよ!!

まあ、過ぎてしまった事を気にしても仕方ない。まだ俺達はレベル1だし、この街から離れることはない。その内会えるだろう。

……そう思っていた時期が俺にもありました。

—数週間後—

「全っつっ然会わないんだけど!?!」

「知らないわよそんなの! 受付の人によれば元気でやってるみたいだし良いじゃない、仲間も一人いるみたいだし!」

「いや良くねえツ!! 風の姿をこの目で確かめないと気が済まねえ! そもそもなんで同じ街にいるのに一度も会わないんだよ!!」

「なんでそこまで心配するのよ、仲間が出来たんなら普通安心する所じゃない?」

「お前は知らないからそんな事言えるんだよ、アイツのロリコンホイホイ體質を!!」

「何の話をしているんですか?」

「ナギとは...?」

俺とアクアが酒場で口論していると、めぐみんとダクネスが頭上にハテナを浮かべる。

「いいかアクア！俺の妹にはな、何故かロリコンの変態が寄って来るんだよ!!別に会ったこともない見ず知らずのオッサンが!!」

「お菓子買ってあげるからオジサンと遊ぼう」とか、「パンツ何色?」とか「ノーブラ?」とか、挙げ句の果てには「一万で良い?」とか!!」

人の妹を変な目で見てんじゃねええッ!!つか買春しようとするな!!二次元なら構わねえけどリアルの子供に手え出すなよ!!」

「落ち着いて下さいカズマ!!」

「ちよつと待てお前妹がいたのか!？」

「因みに聞くが風の死因は?」

「えつと、変態に追いかけられて車に跳ねられて……」

「ほらな!!やっぱりロリコンのせいだろ!?!アイツには俺(セコム)がついてないと駄目なんだよ!!」

感情が昂って暴走してしまった俺の話に着いていけてない二人が慌てているが、今はそれどころではない。俺は風が心配なんだ。

だって引きこもりの俺に優しいし、彼女いない歴〃年齢の俺に毎年バレンタインにチョコ作ってくれるし、俺がゲームしたら隣に来て一緒にゲームするし!

こんな心優しい妹他にいないッ!!

普通なら妹というのは、引きこもりの兄に対して見下していたり罵倒したり、避けたりするものだ。

俺の妹は本当に良く出来た子だと思う、お兄ちゃんっ子だったから口の悪さは俺に似たが。

そんな妹だからこの異世界で一人にするのは不安なんだよッ!!この世界にロリコンがいないとは限らないだろ!?!小学生の妹を異世界で一人にさせて心配しない兄なんていない!!

「……こうなったら奥の手だ」

「ちよつとカズマ、何を……」

俺は席を立ち受付のお姉さんの元へ行つて、ズカズカとカウンターの裏側へ入って行き、アナウンス室と書かれた部屋に躊躇なく入りマ

イクのスイッチを入れた。

勿論街のスピーカーのスイッチも忘れずに。(※この世界のマイクやスピーカーは拡声器同様魔道具です)

——ピンポンパンポン♪

『えー迷子のお知らせです。』

日本から来たサトウナギサちゃんサトウナギサちゃん、お兄ちゃんがお待ちです。

至急冒険者ギルドへ来て下さい。

繰り返しま…』

「うわああああ迷子アナウンス止めるこの駄犬があああッ!!カエルさんの目の前に放置して帰った私が悪かったからあああッ!!」

日本人にとって、迷子のアナウンスは恥ずかしいものである。

施設内に子供の大声が響き渡り、全員の視線が入り口に立っている少女の方に向けられる。俺はマイクのスイッチを切るとアナウンス室から出て、酒場の方へ戻り妹の前に姿を現した。

俺の姿を見て茫然とし、ポカンと口を開けている妹に「よっ」と言っ
て片手を上げた。というか駄犬って誰と間違えたんだよ…見た所元
気そうで何よりだ。

「お兄…ちゃん?」

「うんお兄ちゃんだよ」

「佐藤和真?」

「はいカズマです」

「引きこもりの?」

「うん引き…っておい言わせんなよ」

俺だと再確認した途端、妹はボロボロと涙を流しながら俺に思いつきり抱きついて来た。どうやら家族の顔を見て安心したようで、気が緩んでしまったのだろう。

俺は妹の頭を優しく撫で、背中をポンポンとゆっくり叩いてやる。

…:…ていうかお姉さん達「あらまあ」って感じの生暖かい目で見な

いで!?!やだもう恥ずかしいッ!!

「うわああああんお兄ちやああん!!」

「おーよしよし、寂しかったかー?」

「あのねっ学校の帰りにね!?!たい焼き食べてたの!そしたらキモブタがね!?!ハアハア言いながらお尻触って来てっ!吃驚してたい焼き落としちゃって!!そのまま逃げたら車がドーンってッ!!」

ついにキモブタと言うようになってしまったか妹よ……これから妹の前では汚い言葉は自重しよう。

要約すると、学校帰りに買い食いしてたら変態に追いかけられて車に跳ねられた……ということだな。

「そっかーお前も災難だったなー、俺はトラクターをトラックと勘違いして轢かれると思ひ込んで失禁、その後ショック死だぞ?」

いくら徹してたとはいえ酷くね?」

「……お兄ちゃんカッコ悪い」ボソッ

「おい聞こえてるからな」

コイツステイル噛ましてやろうかと思つたが、漸く笑つてくれたのでまあ許してやろう。俺辛口の自覚はあるけど、妹にはつい甘やかしてしまふんだよなあ……これも兄として生まれた性か。

クスクスと笑っている妹を見て、俺まで釣られて笑ってしまう。

「あー、ゴホン。そこのお二人さん? 私達の事忘れてないかしら?」

「「あ」」

その後俺はアクアの喧しい構って攻撃を受けながら、めぐみんとダクネスに質問攻めにあつた。

To be continued…

第4巻 この駆け出しの妹にクエストを！

妹 side

どうも皆さんこんにちは、最近お兄ちゃんと再開して嬉しい風沙です。幼馴染みの雅也とパーティーを組むことになりました。

本当はこんなロリコンとパーティーなんてなりたくないのだが、やはり同じ日本から来た良き理解者がいた方が楽だし、「服とか装備品とか買っただげるから!!」って公衆の面前で土下座してお願いされたら断れないだろう。

まあ、いざという時は盾変わりにするけどね。

だって打たれ強いし、いくら蹴つても殴つてもめげずに向かって来るし、こんなに固い盾はそうそう無いと思う。ていうか職業がルーンナイトの時点で壁役決定だよ。

……なんか思考がお兄ちゃんに似てきた気がするけど、そこは気にしない。だって雅也だし。

そういえば、装備品を買いに行った時に問題が発生しました。

どうやらエレメンタルマスターというのは、精霊から杖の材料となる四代元素に属した素材を貰い、鍛冶屋で作ってもらう必要があるらしい。

どれほど精霊に好かれるかによって材料の良し悪しも変わるので、どんな良い杖になるかは、エレメンタルマスターの性格や実力にかかっている。

普通の魔法職だったら鍛冶屋の売ってる杖とかで良いんだけど、エレメンタルマスターは精霊の力を借りたりするので、人の手が加えられた素材よりも自然や精霊達によって作られた素材の方が、精霊の力が発揮されるらしい。

……ファンタジーっぽくてちよつとドキドキしたけど、スツゴい面倒臭そう。駆け出しの冒険者にはキツイよ。

だがそんな私にとってもお得なクエストがギルドで貼り出されていた。

ゴブリンの討伐

街の近くにある森の湖付近にゴブリンの群れが住み着いてしまい、湖に住んでいた精霊や小動物達が困っています。

ゴブリン達を討伐して下さい！

報酬は一匹7000エリスです。

これだ!!湖ということは水の精霊がいるに違いない!それに森の中だから地や風の精霊達もいるだろう。

ゴブリン:それはこの世界でも知らない者はいないメジャーモンスターで、ゲームに出てくる様な雑魚モンスターではなく、実は民間人には意外と危険視されているモンスターだ。

個体の力はそれほどでは無いが、基本的に群れで行動して武器を使い、その上衛生観念が無い為に扱う武器が凄く汚い。

ダガー等の小剣で獲物を捌き、その血が付いた武器をそのまま放置し全く手入れをしない。当然錆や雑菌だらけのその武器は、傷を負わされると簡単に破傷風になる。

…と、アクセル図書館にあるモンスター辞典に書いてあった。

レベル上げにカエルさんを倒してスキルポイントをいくつかの魔法スキルに振ったし、雅也の貯金も無くなってきたから丁度良い(生活資金は雅也持ちで暮らしてた)。

レベル上げの時は雅也を困にしました。

カエルさんは捕食中の時に動きが鈍くなるってお兄ちゃんが言ってたからね。

スキルポイントとは、クラスに就いた時に貰えるクラススキルを習得する為のポイント。優秀な者ほど初期スキルポイントは多く、このポイントを振り分けて様々なスキルや魔法を習得する。

因みに魔法のスキルは、個人によって習得出来るスキルが限られてくる。

例えば水が苦手な人は氷結や水属性のスキルを習得する際、普通の人よりも大量のポイントが必要だったり、最悪習得自体が出来なかつ

たりする。

四次元素の他にも雷や爆発等の魔法もあり、そういったものは複合属性と呼ばれる。

いくつもの属性の魔法が複雑に絡み合っている系統の魔法。と、アクア様に教わったのだが……恐らく私はアクア様の加護の影響で、水の属性魔法が強いだろう。

だってスキルポイント振る時に、水の属性の消費ポイントが他と比べて少なかったからね。

ある程度魔法も覚えたとし、今の私なら雅也を囚にすればゴブリンに倒されることもなく大丈夫だろう。

そう思い、私は雅也を引き連れて森へ向かった。

―森「フォレスト」の奥地フラメン湖―

「……森の名前がフォレストなのは納得出来るんだけどさ、テキトーで単純だけど。なんで湖の名前をフラメン湖にしたんだよ、シヤレとかいいからマトモな名前つけろよ。」

「そういえばこないだ馬車引いて街に来てた人が、『走り鷹鷲』なんてシヤレのモンスターがいるって言ってたよ」

「マジで!？」

この世界の人々のネーミングセンスはどうなっているのだろうか。まあ最初に発見した人がつけているんだろうけど、フラメン湖と走り鷹鷲の名前をつけた人は同一人物に違いない、うん。

絶対そうだと思う、あと冬牛夏草も。

「ついたけど……」

「……これは」

なんでゴブリンがフラメンコ踊ってんだよ。

あれか、この湖周辺ではフラメンコが流行ってるのか。だからこの湖の名前はフラメン湖なのか。

なんでだよッ!!なんでモンスターがフラメンコ踊るんだよッ!!しかも地味に上手いし:は、激しいッ!!

いっちょよまえに薔薇加えちゃって!!しかも雌と思われるゴブリンはリボン付けてる奴もいる!

兎に角、これは襲撃するチャンスだ。

まず私が忘れかけていた特典のオマケである箒に乗り、上空からフリーズガストでゴブリン達を氷漬けにし、身動きがとれなくなった所を雅也が切り込んで行き、私が上空から支援。雅也が仕留め損ねたゴブリンは私が魔法で倒す。

よし、駆け出しの私達には十分な作戦だ。

これなら簡単に倒すことが出来るだろう。

「準備は良い?」

「ああ、いつでも良いよ」

「じゃあ手筈通りにいくよ、フリーズガスト!!」

私は今回初登場である箒に跨がり、湖の上空を一周しながらフリーズガストを撒き散らし、ゴブリンの動きを止める。その隙に雅也が茂みから飛び出して行き、固まったゴブリンを倒して行く。

完全には凍っていなかったゴブリンが雅也の背後に回ろうとしていたので、ファイヤーボールを喰らわせておいた。

「セントティンダー!!」

「おお、それってルーン魔法? 剣が炎纏ってる!」

「ルーンナイトは盾職でもあるけど、魔法剣士でもあるからな!」

それから私達はスムーズに倒して行き、最後の一匹も倒し終わった。レベルも上がったし早速精霊はいないかと辺りを見回していると、湖の中から...

「え:女神様?」

まるで女神の様な美しい水の精霊が現れた。

To be continued...

第5 囁 この杖の無いエレメンタルマスターに素材を！

妹 side

ゴブリンを討伐したら、湖から水の精霊が現れました。

「おお…めっちゃ美人」

「この精霊さんを想像した人はきつと、木こりの話に出てくる湖の女神をイメージしたに違いない。あの斧持つてくるやつ。」

水の精霊は私達に微笑み、ペコリとお辞儀して話しかけてきた。

『冒険者さん、我々の湖を取り戻してくれて感謝致します。』

「喋った!!」

「そりやそうだよ、湖の女神っていつたら話しかけてくるイメージあるじゃん」

『貴方達にお礼をしたいのですが、小さな魔女さんは…見たところエレメンタルマスター精霊使いのようですね。』

それに貴女は私の眷属の女神様の気配が…これは…

どうやら私にかけられた加護に気がついたようで、水の精霊は驚いて目を見開いている。

『素晴らしい!! 貴女はアクア様から祝福を受けているのですね! 杖の素材を集めている最中のように、貴女にはお礼として最大級の物を差し上げます。』

アクア様万歳!! アクア様に気に入られて良かった! ありがとうございます! ございます!

私アクシズ教に入信しようかな…アクア様はアクシズ教に崇められてる女神様って言ってたし。でもこないだお兄ちゃんに言ったら全力で止められたんだよね…。

私の箒はニワトコの木で出来ているらしく、これを杖の芯にすれば良い杖が出来ると水の精霊に言われた。

箒は木自体に神様から特殊な魔法がかけられているので、箒を解体

しても木があればちゃんと飛べるので問題ないそうさ。

この箒は使いたい時にいつでも目の前に出現する持ち運び便利なものだったので、これを杖にすれば……空を飛べる持ち運び便利な最強の杖になると言うことだ。

空飛ぶ杖とか何処のカードキャ○ターだよ!!でも便利だから問題ナツシング!!

『ニワトコは……黒い女神への戸を叩く……』ボソツ
「え?」

『いえ、なんでもありません。それでは貴女に、最大級の素材を……』

そう言うと、ザアア……と風で木々が靡き、大きな金色の鳥が現れた。

……あれ、なんかドラ○エのラー○アっぽい、FC版の。FCのラー○アは白つてことになってるけど、レ○イスの印象のせいかな金色のイメージがあるよね。

水の精霊曰くこの鳥さんは風の精霊だそうです。……絶対日本人だろこの精霊達を連想したの、精霊は人間が連想した姿になるってアキラ様が言ってたし。冬の精霊も日本人が連想したせいで冬將軍になつたそうさ。

私は風の精霊って妖精さんみたいなのイメージしてただけだなあ……まあ精霊は一体という訳ではなく世界中にいるらしいし、きつと妖精さんみたいなのもいる……はず。

ピイイーツ!!

風の精霊の美しい鳴き声が周りに響き渡る。

すると……何処からか他の精霊達が姿を現した。

ドラゴンの様な翼の生えたサラマンダー擬きや冬將軍、他にも色々な精霊達が集まった。何これ凄い。

集まった精霊達は輪になり、何かを作り始めた。

水の精霊が水の膜で球体を作り、それを地の精霊が結晶化させガラストームの様なものになる。風の精霊が球体の中に風を送り、火の精霊が炎を入れたことよって、中の炎が風で揺らめく。

結晶化させた際に開いた穴を火の精霊が熱して綺麗な球体にし、それを冬の精霊が冷ます。

こうして、世界に一つだけの幻想的な美しい水晶玉が出来上がった。水晶の中で炎が揺らめいて、とても綺麗だ。

精霊達の魔力が籠められているので、強力だからか清らかなオーラを纏っているのが見える。中に炎があるので、触ってみるととても冷んやりしている……水で出来ているのもあるだろうが、先ほど冬の精霊が冷やしていた時の魔法がかかっているのだろう。

「凄い……」

『この水晶を素材にお使い下さい。我々の力を籠めたこの水晶の杖ならば、どんな精霊も協力してくれることでしょう。』

そして、我々からも貴女に祝福を……』

そう言つて、水の精霊を筆頭に精霊達が何かを唱え、私の身体は光に包まれた。

『これで少しは、貴女を苦しめる古い鎖を緩和出来た筈です。どうか今世では、貴女の人生に幸多からんことを』

「え……、古い鎖つてどういう……」

水の精霊は頬笑むだけで、何も答えずに精霊達と共に消えてしまった。

T o b e c o n t i n u e d …

第6巻 この幼馴染みに回復魔法を！

妹 side

「カエルさんは飽きたし雅也がトラウマ持ちちゃったから……うーん、これなんてどう？」

コボルトの群れの全滅。こないだ行つたフラメン湖の近くみたいだよ、報酬も結構貰えるみたいだし」

どうも皆さんこんにちは、良い杖をゲットしてテンションが上がっている凧沙です！

最近宝島という俗称の玄武のお蔭で大金を手に入れたので、当分は金稼ぎしなくても良いんだけど……。

折角精霊魔法を使えるようになったんだから、スキルレベル上げたい！！

というわけで、最近討伐クエストを黙々とやっています。

因みに玄武とは街の外に現れる巨大モンスターで、十年に一度甲羅を干す為に地上に出て来ると言われている。

地上に出てくるのは、普段は地中で生息している玄武が、甲羅に繁殖したカビやキノコや様々な害虫を日干しにする為だと言われているが、定かではない。

一つだけ分かっているのは、玄武は暗くなるまで甲羅を干すという事。そして玄武は鉱脈の地下に住み、希少な鉱石類をエサにする為、その甲羅には希少な鉱石が地層の様にくっ付いている。

なので、その鉱石を採って売れば、冒険者達は大金を手で引き出すハウハになるのだ。

私達もそのウツハウハな冒険者の一人なのだが、漸く精霊魔法を使えるようになった私としては……レベル上げツ!!せずにはいられないツ!!

「コボルトって…ゲームでお馴染みの？」

「うん、メジャーモンスターのコボルト。弱いのに討伐金額はそこそ

こ高い、美味しい部類のモンスター。

弱いけど繁殖力が旺盛で、大量に増えると人を襲ってきたりもするから、見つけたらすぐに討伐依頼が出されるの。

依頼が張り出されるとすぐ皆受けちゃうから、このクエストが残っていたのはラッキーだったね」

まあ、受付のお姉さんから聞いたんだけど。

この世界の住人じゃない私は、ここのモンスターにそんな詳しくないからね。

雅也にも弱いならということでした承を得たし、私達は早速討伐へと向かった。

—フラメン湖付近—

「あ、いた」

コボルトらしきモンスターを発見した。

湖のほとりで魚でも捕まえようとしているのか、湖に入ってバシヤバシヤと暴れている。

折角ゴブリン討伐して湖に平和が訪れたと思ったのに…この湖はモンスターを呼び寄せるような何かがあるのだろうか。

私達は湖から少し離れた茂みに隠れたまま、コボルト達の様子をうかがっていた。

シベリアンハスキーみたいな顔をした二足歩行の獣人達は、鼻が良いのか私達の方を頻りに気にして、その鼻をひく付かせている。

私はその様子を見て、隣の雅也と顔を見合わせる。コボルト達は殆どが一ヶ所に纏まっており、今なら魔法で一網打尽に出来そうだ。

万が一討ち漏らした時に備え、雅也はそつと剣を引き抜いて私の方を見て頷く。

それを見た私はスウ…と息を吸い、杖に力を籠め精霊魔法を唱える。

「暗雲に迷える光よ…我に集い、その力解き放てッ!!『サンダラッ!!』私の杖先から閃光が走り、コボルト達の群れのど真ん中に突き刺さ

る。

ピシヤアンツゴロゴロゴロツ!!という轟音と共に、湖に巨大な波紋と波を起こし、コボルトの大半が焼け焦げになって倒れた。

だが、私の精霊魔法のスキルレベルがまだ浅いせいか、数匹のコボルト達が魔法の影響範囲から免れ生き延びていた。

生き延びたと言っても、雷魔法なので痺れたようで、麻痺状態になっっているみたいだ。

その隙に雅也が茂みから飛び出し、生き残ったコボルト達へ両手で構えた大剣を、大上段に振り上げて斬りかかりトドメを刺す。

「ふう、これで討伐完了だな!」

「おっつー、今日は楽勝だったね。早く帰って大衆浴場行こうよ、あそこご飯前になると混みだすから」

そう言っつて欠伸びしていると、ガサツと背後から音がして「危ないツ!!」と雅也が叫ぶ。

振り返ると、黒い塊が襲ってくるのが見えた。あれは……初心者殺しだ。

一言で言えば、猫科の猛獣。

虎やライオンをも越える大きさのソレは、全身を黒い体毛で覆われ、サーベルタイガーみたいな大きな二本の牙を生やしている。

鋭い爪を光らせ、前足を降り下ろしてくる初心者殺しを見て、私は身構えギョツと目を閉じる。しかし、想像していた痛みはやってこない。

「……?」

恐る恐る目を開けると、そこには両手を広げ私を庇う雅也がいた。いくら鎧を着けているとしても、今の私達がこんなモンスター攻撃を受ければ、堪ったもんじやない。

「雅也ツ!!」

ドシヤツと崩れるように倒れた雅也の前に立ち、私は初心者殺しへ氷結魔法を放ち凍らせ、すぐに雅也の傍へ駆け寄る。

ガツチゴチに凍らせたので、初心者殺しは当分動けないだろう。それよりも雅也の傷が心配だ。

鎧を着けているので体は打撲と切り傷等で済んだみたいだが、顔に攻撃が当たったようで、左目辺りに爪跡があり血が止まらない。

もしかして失明したんじゃないかと想像し冷や汗が出る。

「ああもうなんで剣で受け止めないかなあッ!!確かに私は攻撃魔法しかダメー半減しないから、あの一撃で死んでたかもしれないけどさ!!」

「ハハッ…咄嗟だったからな。ルーンナイトが幼女一人護れなくてどうすんだよ」

「幼女言うな」

「それに…和真と約束したしな。何がなんでも凧ちゃんのこと、死んでも護るって。」

「それでもしないとあの過保護な和真が、凧ちゃんが自分以外のパーティーに入ること許すわけないだろう?」

「いつの間にそんな話をしていたんだ、初耳だぞ。なんだよ雅也のクセに生意気な…らしくないことしちやつて。笑ってんじゃないよ馬鹿。」

「こんなことになるなら治癒魔法覚えておくんだった…雅也は固いから大丈夫なんて高を括っていた。」

「そう後悔して下唇を噛んでいると、雅也は疲れたのか気絶してしまった。」

「ちよつと、こんな所で気絶されたら街に行って回復出来ないでしょ!?私みたいな子供が雅也を運べるわけないじゃんッ!!ちよつと起きてよ、ねえッ!!」

体を揺するのは良くないので声をかけるが、起きる気配はない。寧ろ顔色が少し悪くなってきた。血を流し過ぎたせいかな。

「流石に死ぬまでには至らないだろうが、この状況はマズイ。先程凍らせた、初心者殺しの氷も溶け始めてきた。」

「どうしようッ…誰か!誰かいないのッ!」

すると、ガサツという音が聞こえ、「シーシャ!」という声と共に青年が現れた。長い銀髪を一つに結び、神父の様な服を着ている。人を探していたのだろうか?

「シーシャ…?」

「…いえ、なんでもありません。それよりその彼は…」

「そうだった!今は雅也が最優先だ!!」

「お願いです、この人を街まで運んでくれませんか!?私を庇って怪我しちゃって」

「……………ちよつと失礼」

「そう言うと、青年は雅也に近づき手を翳し、治癒魔法をかけてくれた。

服装はそれっぽいとは思っていたが、まさかプリースト系の職業の人と遭遇するなんて!良かった幸運高くて!!」

「ありがとうございます!助かりました!」

「そんな、当たり前のことでしたよ。貴女の為ならどんなこと……………も…」

言い終わる前に、青年はドサツと倒れた。

「えッ!?ど、どうしたんですか!?まさか貴方も怪我を…」

「……………を下さい…」

「え?」

「貴女の…血を…………」

「え…………」

そう言つて、青年は勢い良く私の首筋に噛みついた。

T o b e c o n t i n u e d …

第7巻 この二人組。パーティーに聖職者を！（前編）

妹 side

「やッ…やめ……」

青年は突然私の首筋に勢いよく噛みついてきて、犬歯を突き立てた所からじゅるりと血を啜る。コイツ…ヴァンパイアだったのかッ!?

ヴァンパイアとは、アンデッドモンスターの最高峰リッチーと並び、有名な大物アンデッドモンスターである。

生命の根源とも言われる血を吸い、栄養源とする蘇った死人または不死の存在。

とは言っても、普段から定期的に鉄分なり他人の血なりを補給していれば問題ないので、ヴァンパイアが血を吸う目的は、血を介して他人の魔力を奪うというのが主な目的なのだが……このヴァンパイアはどう見ても血が不足してるだけみたいだ。

まさかこんな真っ昼間の森の中で遭遇するなんて思わなかったよ！古びた洋館とかにいそうなイメージだったよ!!

先程までの紳士的な雰囲気は何処にいったのか、音を立てて啜るその姿は、まるで獣のようだ。……いや、弱っている様な感じで倒れたし余裕が無いだけか。

だとしても、これは……

「ハアッ…ハアッ……じゅる」

「ひやッ……ちよ…舐めちゃ……」

メチャクチャくすぐったい!!

やめてええええ変な声出ちゃうからああアッ!!ぞわぞわするからやめてええええッ!!なんでそんな貧血なの!?

パニック状態になりどうすれば良いか分からず、されるがままだったのだが……あれ、何か眩してる?!

「ハアッハアッ……」

「……ん?」

「ハア…幼女ッ……ハアッ…「ってロリコンじゃねえかよッ!!」ゴ

フウツ!!」

殴られたヴァンパイアは、そのまま地面に倒れ気絶した。イケメンヴァンパイアに吸血されてちよつとドキドキしてたのに、ロリコンかよツ!!私のトキメキを返せツ!!

その後、危機が過ぎ去った雅也を無理矢理叩き起こし、ヴァンパイアを縄で締めた状態で街まで運び、私達が寝泊まりしている馬小屋まで連れてきた。

なんか馬小屋の入り口辺りで体がビクツて痙攣してたけど、大物アンドンだしまあ大丈夫だろう。口から出かかった魂も押し込んだし。

—1時間後—

「ん……?この馬糞臭い所は……」

「あ、起きた」

「ようこそ、多くの冒険者が寝床にする馬小屋へ。よくも俺の尻ちやん襲いやがったなこの野郎、回復してくれたのは有り難いけどそれだけは許さ」「はいはい話進まないから雅也は黙ってて」「はい……」

雅也が早口になり掴みかかりそうな勢いだったので、話を進める為に黙らせるとシユンとなり縮こまった。

ちよつと、隅っこでキノコ栽培しないでよ。

「とりあえず、名前を教えてください?」

「……私はウイリアム。ご存知の通り、大物アンドンmonsterのヴァンパイアです。こう見えて魔王軍の一員でしたが、随分前に辞めてしまい、人探しの旅に出ていました。

しかし……どんなに空腹を満たせても、血を摂取しなければ干からびていくばかりで。先ほどのようなことに……」

「馬鹿だ、コイツ馬鹿だ。鉄分取れよ」

だからこんなにガリガリになってたのか。

腕なんて簡単にポキツと折れちやいそう、レバーとかハウレン草とか何かしらあったら。鉄分を取れ鉄分を。

「そもそも、なんで今まで血を吸わなかったの？人間と遭遇することもあったでしょ」

「いえ、確かに人間と会うことはありましたが……どいつもこいつも屈強な冒険者ばかりで。女性に会ったとしても大人ばかりで、全く興味をそそられないんですよ！」

……はい？

「私は幼女が好きなんですよッ!!思わず触りたくなるスベスベの肌! プニプニのほっぺ!子供独特の柔らかな髪!そしてあの無邪気な笑顔ッ!!もう想像しただけで……おっと失礼」

そう力説しながら、ウィリアムは垂れてきた涎をじゅるりと啜り、口元を拭う。

駄目だコイツ、早くなんとかしないと。

そんな偏食の理由で貧血になってたのかよ、まさか探し人って幼女?幼女を求めて三千里……駄目だ、シャレにならない。

真性の変態はどこまでやらかすか分かったものじゃない。

「うーん、やっぱり通報した方が良いかな?」あの……ん?」

「あなた方のパーティーは二人だけなのですか?」

「そうだよ、仲間を募集したこともあったんだけどね……なんか鼻息の荒い男ばかり集まっちゃってさ」

そう、実はギルドの掲示板にパーティーメンバーを募集したこともあったのだ。しかし、集まってくるのはロリコンばかり。

下卑た笑みを浮かべた小太りなオッサンや、寡黙で屈強な真面目な奴と思いきや鼻息が荒い男、加虐趣味のセクシーお姉さんとetc…。

この街にマトモな冒険者はいないのか。

こんなんじゃないや埒が明かないので、募集は一旦止めることにした。自分達で見つけて勧誘する方がマシだよな、うん。

「でしたら、是非私をパーティーに「だが断る」えっ……」

私が言葉を遮り断ったことにより、ウィリアムは石の様に固まり動

揺している。

「何故ですか？クレリックの私に加われれば回復に困りませんし、戦闘経験も豊富です。私がいの方が圧倒的に有利なはずですよ！」

「有能かどうかとか、そういう問題じゃないの。うちのパーティーはロリコンお断りなの！変態はさっさとお帰り下さいッ！」

そう言っ私はウイリアムを出口の方へとグイグイ押していくが、自分自身が小さいせいで、背の高いウイリアムを押ししてもびくともしない。

私はムスツと頬を膨らませながら、ウイリアムの顔を見上げる形で覗きこむと、そこにはゾツとするような不気味な笑みを浮かべたウイリアムの顔があった。

「フフ、フフフ……そうですか。貴女の傍にいられないのなら……いっそ拐ってしまおうか」

「え、拐っ……!?!」

そう言った途端、ウイリアムは私を抱き上げ出口へと向かう。ちよつと、然り気無くお姫様だつことかやめてくれない？

「おい早まるな！凧ちゃんを返せッ!!」

雅也は焦った様子でウイリアムの前に立ちはだかり、逃げられないように出口を塞ぐ。

「退いて下さい、さもなければこの馬小屋ごと貴方を塵にしますよ」

「やれるもんならやってみろッ!!」

ええええ……何このベタな展開、二人とも戦闘体勢に入っちゃったよ。詠唱を始めようとするウイリアムを見て、雅也は剣を抜く。

え、これって私大人しくジツとしてなきや駄目？「私の為に争わないで二人とも！」なんて言っ泣いた方が良い？

……うわ、想像しただけで寒気が。私が悲劇の……とかベタなヒロインやれるわけがない、そんなの私じゃない。

というわけで、このベタな展開を壊させていただこうか。

「後悔しても知りませんよ……」地の砂に眠りし火の「ねえ」……はい？」

「何勝手に戦闘始めようとしてるの？私が大人しくしているとでも

思った？」

「え……」

「必殺ッ!!」子供の頭は石頭（ストーンヘッド）「ッ!!」

「ぐっふうッ!!」

そう言つて私は、ウィリアムの顎下に頭突きをかます。突然の出来事に反応できなかったウィリアムは、私を抱き上げていた腕の力を緩めてしまう。

その隙に腕から逃れ地面に着地し、ウィリアムの急所目掛けて、お兄ちゃん直伝金蹴り（ゴールデンキック）を喰らわせた。

「今の内に……雅也行くよ!」

「お、俺の見せどころが……いいから早くッ!!」はい……」

私は「うわあ……」と呟いて自分の急所を押さえていた雅也を引つ張り、床で痛み悶えているウィリアムを放置し二人で逃げた。

……後半へ続く。

To be continued……